

研究の概要

1 研究テーマ

仲間とともにつくる 生活に生きる算数科学習

- つまずきを生かして個に確かな力をつけるための学習指導のあり方 -

2 研究テーマ設定の理由について

平成 14 年度から完全実施となった新学習指導要領において、小学校算数では、ゆとりを生かし、具体物を用いて作業する活動や、自分で確かめたりする体験的な活動等、児童自身による主体的な活動を基にすることや、算数的な活動に取り組むことによって、考える力を高めることが求められている。児童がこれまでに学習したことなどを基にしながら、自分で工夫をして問題を解決したり、新しい考え方や処理の仕方を生み出したりできるようにすることが大切なのである。さらに、基礎的・基本的な学習内容はもちろんのこと、発展的な学習内容についても実態に応じて進めていくことが求められている。

また、少子化が大きな社会問題を生みつつある現代、児童の様子を見ていても、他者との関係をうまく保てない子どもや友だちとよくトラブルを起こす子どもが増えているように思う。それは、家庭や地域でも人と人との交流が少なくなってきたためであろう。そこで、自分を知り、みんなと学ぶ楽しさを体得させるために、児童同士が、児童と教師が関わりながら、「分かり合う喜び」を共有し、共に高まっていくという学び合いの学習をめざしたいと考え、研究テーマを設定した。

(1) 仲間とともにつくる算数科学習 とは

学習課題を解決するため、既習内容を使って見通しを立て、算数的な活動を通して子ども同士がお互いのよさを認め合い、関わり合いながらよりよい考えをつくりあげていくこと。

子ども一人ひとりが生き生きと課題追求にあたるためには、子どもにどのような内容や力を獲得させるかを教師が見極めておき、適切な支援を考えておかなければならない。また、ともに学ぶ集団も子ども一人ひとりが個性を発揮し、相互に認め合い、友だちの思いや願いをくみとって進んで関わろうとする態度を育成することが重要であると考え。

(2) 生活に生きる算数科学習 とは

ここでいう「生活」とは、家庭や地域社会の日常生活、学校での教科や総合的な学習の時間等のいろいろな学習場面、将来の社会生活も含まれる。算数での学習が生活の中で直面した問題の解決に生かされることによって、学習が意味あるものとなり、算数のよさを実感を伴って味わうことができる。「生活に生きる」とは、学習場面において既習の知識を活用して新

しい算数の知識や方法を生み出したりすること、さらに、日常生活や社会生活の中で、学習の成果が発揮できることと考える。

(3) つまずきを生かして個に確かな力をつける とは

一般的に学習におけるつまずきは、「わからない」「できない」「とまどう」など、学習進行上で停滞したり、投げ出したくなったりする状況と捉えられている。本校でいう「つまずき」とは、「その時間に新しく学習する課題や内容、および内容を理解するための既習事項の中で定着

していない力や態度」である。なお、つまずきには「達成度としてのつまずき」と「学習経過上でのつまずき」があり、個人差もある。

われわれ教師は、つまずきを克服できるように、これまでの学習状況調査や「じゅんびテスト」結果におけるつまずきの分析を生かして、単元計画を工夫したり、個々の児童のつまずきに対して適切な支援を行ったりしなければならない。計算処理ができて、式の表す意味が分かっていなかったり、考えの道筋が説明できなかったりすれば、理解できたとはいえない。そこで、子どもたちが算数的な活動を通して自分なりの考えを導き出し、それを相手が納得できるように説明したり、友だちの見方・考え方から自分の誤答に気づき、新しい考え方を発見したりすることを目指している。そして、「つまずかせない授業づくり」を考えるだけでなく、つまずきの実態から出発し、「つまずきを克服する授業づくり」に取り組みたい。

3 研究構想

(1) 研究仮説

児童のつまずきの実態に基づき、身近な教材を取り入れた学習を展開することにより算数の楽しさを感じとらせ、意欲化を図ることができるであろう。
少人数指導を核に仲間とともに学び合う学習方法を充実させることにより、児童が学び方を習得できるであろう。
評価と指導の一体化を積み上げることにより、児童一人ひとりが自己評価力を身につけ、基礎的・基本的な内容を習得できるであろう。

4 研究内容

(1) つまずきの洗い出しとそれを生かした単元計画づくり

全学年とも、単元の学習に入る前の「じゅんびテスト」結果や平成15年度と16年度の学習状況調査のデータから、児童のつまずきを分析する。そして、指導案の中につまずきの実態やそれに対する支援を明記する。また、担任と少人数加配教員が、分析結果を生かして一人ひとりの児童にわかる・できる喜びを体得させるための単元計画を作成する。

(2) 領域・単元ごとのつまずきの傾向とその支援についてまとめる

授業実践の中で見つけた「つまずきと支援」を記録し、それをファイル化することにより、個々の児童の伸びをとらえ、効果的支援を模索している。さらに本年度は、15年度に洗い出した単元ごとのつまずきを学年別に整理し、一覧表を作成する。

(3) 児童の自己評価力を高め、次時の指導・支援に生かす工夫

平成15年度は全学年とも、学期ごとに単元テストの平均点と「ふり返りアンケート」の関連性をさぐり、グラフ化した。児童の理解度をアンケートと平均点を重ねてみることで、教師は支援のあり方を反省し、次の指導へと生かすことができた。また、授業の終末に「ふり返りカード」を学年に応じて随時使用することにより、自分の学習態度や算数の力を自覚できる子が増え、友だちのがんばりやよさにも目が向きだした。さらに本年度は、学年段階に合った自己評価カードの開発や教師と児童の評価の共通性をポイントにする。

(4) **つまずきに対応したドリルプリントの作成と活用**

「ドリルタイム」の設定
パソコンソフト等の活用

(5) **教室環境整備と教材・教具の開発**

単元の系統性や既習内容が生きる掲示や教具づくり
身近に算数と親しめるコーナー設置

(6) **算数科学習や少人数指導についての児童・保護者対象としたアンケートの実施と考察**

年間2回 5月・12月 実施予定